

平成 26 年度 甲子園指導者研修 報告



1. 期 間

平成 26 年 8 月 10 日 (日) ~ 12 日 (火) 一泊三日

2. 場 所

阪神甲子園球場 (兵庫県西宮市)

3. 宿 舎

アパヴィラホテル (大阪市中央区農人橋 1 丁目)

4. 内 容

11 日 開会式見学

試合視察 龍谷大平安 一 春日部共栄
坂出商 一 敦賀気比
日大鶴ヶ丘 一 富山商

球場施設・設備見学

理学療法士サポート

12 日 試合視察 日南学園 一 東 邦
静岡岡 一 星 稜

5. 参加者

小林 尚樹 (北信支部 下高井農林) 新井 利尚 (東信支部 上田千曲)
黒岩 耕平 (南信支部 上伊那農業) 峰村 和光 (中信支部 明科)
寺澤 誠一 (責任者 松本蟻ヶ崎)

高校野球の聖地、甲子園球場。全国中等学校野球選手権大会の開催を目的に 1924 年 8 月 1 日に開設され、今年で 90 周年を迎えた甲子園球場で行われた第 17 回甲子園指導者研修に、今年も 4 人の若き先生方とともに参加した。

研修初日は台風 11 号の影響で路線の乱れが激しく、阪神電車も運休のため当初予定した甲子園の施設見学も中止。特急しなの全休もあって東京経由で県代表校宿舎に直行することになった。平成 10 年から実施された本研修で雨による初日の研修中止は、平成 21 年の第 12 回監督研修以来 2 度目であるが、二泊三日の研修を無事終えることができたのも連盟関係者のおかげである。本研修でお世話になった皆様に心より感謝したい。



開会式の選手退場



甲子園の土が入った記念品

研修 2 日目は大会の日程変更に伴い、開会式の見学からスタートした。例年大会本部に考慮した研修日程になるため、開会式を直にスタンドから見ることはできないが、今回は台風のおかげで見学する機会を得た。又、甲子園球場開設 90 周年も重なり、大会初日の入場者に配られた記念品を受け取ることもでき、これも今回の研修参加者にとっては良い記念となった。



阪神甲子園球場三塁側ベンチ・冷風機



今年も井本亘高野連事業課長にお願いして球場施設・設備見学を行った。今年度は暑さ対策のための冷風機のベンチ設置の試みを聴き、また一つ、我々の見えないところで行われる選手の健康への配慮を知ることができた。

今回は練習視察を実施できなかったが、甲子園での観戦や施設見学を通して「若手の指導者に甲子園を直に見て知ってもらい、意欲を高めてもらおう」という本研修の趣旨は充分達成されたことと思う。

最後に、今回参加された先生方をはじめ、本県連盟関係者の更なる活躍、発展を祈念し研修報告とする。



インタビュー通路

平成26年度甲子園指導者研修報告

下高井農林高校 小林 尚樹

1. はじめに

今回の甲子園研修では、テレビでは伝わらない緊迫感・臨場感を甲子園で目の当たりにし、私にとって大変貴重なものになりました。甲子園の雰囲気、応援の熱気、グラウンドでプレーしている選手の表情、どれをとってもみても改めて甲子園という魅力を感じさせられました。

私自身甲子園に足を運ぶのは今回2回目で、前回訪れたのはもう10年も前の事で、忘れていたあの時に感じた「野球の魅力！」を改めて思い起こす事が出来ました。

さらに今回の甲子園研修では、テレビではなかなか中継されにくい場所を拝見する事ができとても有意義な研修になりました。今回の研修で感じた事などをまとめ報告させていただきたいと思います。



2. 開会式より

皆さんご存じの通り、今大会は開会式直前の台風の影響で2日間順延になり、当初予定されていた研修日程とは変更になってしまい、研修初日は大阪移動だけという1日目になってしまいましたが、そのおかげで開会式と日程が重なり、地方大会を制覇した全国の高校球児を見る事ができた。私自身甲子園で試合観戦をした事はあったが、甲子園の開会式を見るのは初めてでした、しかも大会役員席から眺めるといった経験は当然今まで経験する事はなかったの、それだけで満足感に浸ってしまいました。しかし周りを見渡すと、各都道府県の会長、理事長といった方々がおり、この場所に座っていて良いのだろうかと思ってしまった。

間近で見た開会式はなかなかテレビでは伝わらない、選手の熱気、ファンの熱気にあふれていた。当然ながらスタジアムは満員に埋まっている中選手達は堂々と入場行進していた、その姿を見た時、やはり甲子園に出場する学校は雰囲気が違うなと感じました。行進する手の振り方や選手それぞれの表情、どれを見ても高校生の雰囲気ではなかった。(ちなみに一番大きな声援はやはり大阪桐蔭だったと感じました。)

3. 試合観戦より

8月11日

〈龍谷大平安 対 春日部共栄〉

開幕試合となったこの対戦は、選抜優勝校の龍谷大平安が優勢という予想とは裏腹に開始早々ピンチを迎えた。初回春日部共栄は、先頭打者がヒットで出塁し、次の打者は送りバント。処理した投手が一塁悪送球で無死1、3塁のピンチで、3番が犠牲フライで1点を先制。あっという間の先制攻撃でした。

開会式直後という慌ただしい中で、龍谷大平安高校の選手達は少し緊張していたのか、いつもはアウトに出来るようなバント処理だったが、甲子園の雰囲気に飲まれているように見えました。結局初回到に5失点というイニングになってしまい、龍谷大平安は初戦

敗退してしまいました。選抜優勝高校でも、夏の甲子園勝利は簡単ではないと思いました。

〈坂出商 対 敦賀気比〉

この試合は、とにかく敦賀気比の打線に驚かされました。結果は皆さんご存じの用に21安打16得点いう内容でしたが、敦賀気比の打者それぞれ共通して言える事はスイングが速球にも振りまけておらず甘い球の見逃しが少なく、センター返し中心に攻撃していたように思いました。

しかも詰まった当たりでも、外野手後方まで伸びていく場面もあり、パワーも見せ付けられました。また、敦賀気比の選手の体格の良さに驚きました。

特に太股が太く、強力打線はこの太股の力からきているのではないかと思います。



(平沼投手 3安打無失点の力投)

〈日大鶴ヶ丘 対 富山商業〉

なんといってもプロ注目左腕 MAX146 ㎞。富山商業森田投手が気になりました。長身から投げおろすボールは伸びがあり 120 ㎞。台のスライダーにバットは空を切り 6安打完封勝利の内容でした。

森田投手はユツタリとしたフォームで低めに丁寧に投球し、速球だけではなく制球力も抜群でした。

この日は全試合終了後高野連本部の方の案内で甲子園球場の中を見学させていただきました。現在甲子園ではインタビュー終了後、各チームがトレーナーの指導の下クーリングダウンを行っていました。両チーム共別々の部屋に入り約 15 分間行っていた。連戦が続く甲子園では選手のコンディショニングや障害予防が大切なのだと見て取れました。

その後室内練習場やベンチ内を見学した。室内練習場には高野連が用意したウォーターサーバーが設置され、ベンチにも高野連が用意したドリンクがありました。

8月12日

〈日南学園 対 東邦〉

東邦1年生投手藤嶋君の安定感に驚きました。1年生ながら甲子園のマウンドで堂々と投げる姿は、とても5ヶ月前まで中学生だったようにはとても感じられませんでした。球速も 140 ㎞。台と、さすが東邦高校と思いました。

〈静岡 対 星稜〉

地方大会で、8点差を逆転し優勝した星稜高校。グラウンドに姿を現すと球場全体が星稜高校に注目
甲子園でも序盤は静岡高校に1点リードを許していたが終盤に逆転し最後まで諦めない姿で初戦突破。

しかし、肝心の逆転場面我々は時間の都合で帰路につき始めていた所でした。



観戦して感じたことは、守備面では各チーム共に野手の捕球から送球までの動きが機敏で、送球も安定しており、肩も強かった。

打撃面では速球に負けないスイング力と選球眼、そして何より初球から積極的に振るという心構えだと思いました。どうしても失敗を恐れて、甘く来たボールに手が出ない選手が多い中、甲子園では甘いボールを積極的にスイングしていました。

そしてやはり一番大事なのは投手力だと改めて思いました。しかも球速・制球力と両方を兼ね備えた投手が複数いないとなかなか勝ち上がっていくのは難しいと思いました。

4. 終わりに

今回の研修では室内練習場やベンチ内、クールダウンの様子といったテレビでは見ることのない場所まで拝見させていただく事が出来、大変勉強になりました。

期間中学んだことを今後のクラブ活動に活かしていきたいと思えます。そして研修機会を与えてくださった長野県高等学校野球連盟に心から感謝申し上げるとともに少しでも長野県高校野球の発展に努めてまいりたいと思えます。

最後になりましたが、一緒に甲子園研修に同行して頂いた寺澤先生には台風の影響で日程変更があったりした中、研修の為にご準備頂きまして、本当にありがとうございました。

また、研修に参加した新井先生、黒岩先生、峰村先生とも意見交換をする事が出来た、いへん有意義な研修をさせて頂きました。この経験が無駄にすることなく、これからの指導にいかしていきたいと思えます。



【開幕試合での1枚】



平成26年度 甲子園指導者研修 報告書

上田千曲高等学校
新井 利尚

今回、甲子園指導者研修に参加する機会をいただき、8月10日～12日の3日間、第96回全国高等学校野球選手権大会を見学してきた。

台風の影響により、10日は移動のみであったため実質2日間の研修となった。

【開会式】

台風による悪天候のため、開幕日が2日間順延された。96回を数える大会で開幕日が2日間順延されるのは史上初めてのことであった。そのため、運良く開会式を見ることができた。

入場行進までの時間に、バックスクリーンに歴代の優勝校が紹介され、なかなかおもしろい演出だと感じた。

入場してくる選手の体格に注目して見ていたが、思いの外、特別体格が良いという印象は受けなかった。だが、細いという選手はほぼいなかったため、どの高校も体作りには重点を置いているのではないかと感じた。

開会式は長すぎることもなく、非常にスムーズに進んでいった。多くの大会関係者の方々の協力があってこそその事だと思う。

【試合観戦】

観戦した試合は、開幕試合である〔龍谷大平安 – 春日部共栄〕〔坂出商業 – 敦賀気比〕〔日大鶴ヶ丘 – 富山商業〕〔日南学園 – 東邦〕〔静岡 – 星稜〕の5試合。

観戦した5試合のうち、4試合で初回到点が入っていた。なかには、初回の攻防で試合が決まってしまう展開もあった。ただでさえ難しいと言われる投手の立ち上がりであるが、それが甲子園となればより一層難しいものであると感じた。

開幕試合は、春夏連覇の期待がされる龍谷大平安と、激戦の埼玉県を制覇した春日部共栄との好カードであった。

この試合は、初回の攻防が全てだった。1回表、春日部共栄の攻撃。先頭打者が安打で出塁し、続く打者が送りバントをした。すると平安の2年生投手がそのバントを一塁へ悪送球。そこから安打・死球がからみ一挙5点。

一方、1回裏の平安の攻撃も、先頭打者が安打で出塁し続く打者が送りバントをするが、こちらは冷静にアウトをとった。その結果、後続は続かずに0点。

結果として、初回の5点が大きく影響し、試合は5-1で春日部共栄が勝利した。

龍谷大平安が、投手のバント処理の練習を怠るはずがないと思う。それこそ、練習に練習を重ねてきたのではないかと思う。それでも、あの場面でミスが出てしまったのは、

- ・甲子園という独特の雰囲気
- ・開幕試合の満員の観客
- ・春夏連覇のプレッシャー

が関係していると考えた。特に甲子園という独特の雰囲気が大きいのではないかと考える。

○甲子園の雰囲気

甲子園では、普通のヒットでも大きな歓声がわく。エラーでもため息のような歓声が響く。この雰囲気は、プレーしている選手に大きな影響を与えるものだと思う。投手からすれば、普通のヒットがまるで連打されたかのように感じるのではないだろうか。

このような雰囲気の中で重要になるのは、「いかに普段通りの自分たちの野球ができるか」だと思う。龍谷大平安のバント処理ミスも、甲子園の雰囲気、開幕試合の雰囲気にのまれてしまった結果ではないかと思う。場所や対戦相手、観客の多さに関係なく、普段通りの野球をすることが甲子園では勝敗をわけるのではないかと感じた。「普段通りの野球をするために必要なことは何か？」を今後考えていきたい。

○投手

5試合観戦して、良い投手に共通することは、やはり〔コントロール〕と〔変化球〕であった。敦賀気比の平沼選手や富山商業の森田選手が140キロを超える速球を投げている、それも魅力ではあったが、2人ともコントロールも良い。

なかでも自分が自チームの選手にお手本にしてもらいたいと思ったのは、日大鶴ヶ丘の秋山選手。身長は165センチと大きくなく、ストレートも120キロ代の左腕だが、とにかく丁寧に低めに投げている。変化球も落ちる球が低めに制球されており、結果的に負けてはしまったのだが、身長が低く球速がなくても打たせて取れば抑えられるという、見事な投球であった。

○打者

各チーム、打者はまずバットをしっかりと振り切っている印象だった。決して大振りという訳ではないが、当てに行くようなスイングではなく、しっかりと振り切る。なので、多少詰まっても内野の間を抜けていったりするのだと感じた。

また、130キロ中盤のストレートでも、甘い高さにすれば簡単に打ち返していた。

長打も多く見られたが、各校ともバントの精度も高かった。

まずは130キロ以上のボールにも振り負けないように、しっかりとバットを振り切る力と、バントなど走者を進める方法を徹底することが必要だと感じた。

○全体を通しての感想

どのチームの選手も、体の強さと動きのスピード感があった。甲子園では試合間隔も短く、攻守交代などでもはやい試合展開が求められる。また、球場は気温も高く熱気に包まれている。その中でプレーするのであれば、暑さに負けない体の強さとスピード感が不可欠であると感じた。

練習の段階から、体の強さ・体力をしっかりをつけ、なおかつスピーディーに行動することが必要であると思う。

【甲子園球場 施設見学】

大会本部の役員の方に球場内の施設を案内していただき、室内練習場や3塁側ベンチに入れていただいた。室内練習場とベンチ内には水やスポーツドリンクが用意しており、大会を支えて下さる方々が、選手が万全の状態で行えるように工夫して下さっていることがよくわかった。

また、よくテレビで見る監督と選手がインタビューを受けるスペースも見学することができた。そこには、取材時間が細かく決められており、長引いて選手に影響が出ないような配慮がされていた。

また、試合終了後は両校に対して理学療法士の方がクーリングダウンを指示する場面も見学させていただいた。ここでも、選手の身体に配慮している場面を見ることができた。

以上のように、甲子園大会では常に選手の事を考えて様々な配慮がされており、大会は多くの方々の支えの中で実施されていることを改めて感じる事ができた。

【その他】

施設見学をさせていただいていた時に、1日目の第3試合の日大鶴ヶ丘高校と富山商業高校の両校が、宿舎に戻る場面に遭遇した。大会関係者の方々と一緒に並んで見送っていると、両校の多くの選手が挨拶をしてくれたのだが、唯一立ち止まって挨拶をしてくれた選手がいた。それが、この試合で完封勝利をおさめた富山商業の森田選手だった。甲子園という大舞台で完封勝利をおさめても、決して偉ぶることのないその姿に、彼はどこでも普段通りの野球ができるのだと感じた。個人的には、とても印象に残る場面であった。

【まとめ】

今回の研修を通して、「甲子園まで辿り着くために求められること」の一端がわかった気がした。と同時に、辿り着くまでの難しさも感じる事ができた。実質2日間の日程ではあったが、非常に参考になる研修とすることができた。

今回、このような研修の機会を設定していただいた長野県高校野球連盟の方々をはじめとし、2日間お世話になった役員の方、同じ研修に参加された県内各校の3名の先生方に感謝します。ありがとうございました。

甲子園研修レポート

上伊那農業高等学校 黒岩 耕平

初めに

台風の影響で大会の開始が遅れたことで、研修二日目が大会の開幕となった。三日間の研修のうち二日間しか甲子園見学ができず、また順調にいけば研修三日目に見られたはずの佐久長聖高校の試合を見られなかったことは非常に残念であった。

しかしながら、本来なら見られなかったはずの開会式を見られたことは貴重な経験である。入場行進で常連校や初出場校、そして公立校に特に大きな拍手を送るファンの方々の熱気を肌で感じる事ができた。

今回の研修では、以下の試合を観戦させて頂いた。

大会一日目（研修二日目）

龍谷大平安（京都） ー 春日部共栄（埼玉）

坂出商業（香川） ー 敦賀気比（福井）

日大鶴ヶ丘（西東京） ー 富山商業（富山）

大会二日目（研修三日目）

日南学園（宮崎） ー 東邦（愛知）

静岡（静岡） ー 星陵（石川）

以上の試合を観戦して感じたことをレポートする。

甲子園で勝ち進むために

甲子園で勝ち進むチームには、安定した打撃力が必要である。

その打撃力を発揮して勝ち進み、今大会で活躍したのが敦賀気比高校である。坂出商業との試合では 16-0 というスコアで圧勝しており、最終的にはベスト4に進出している。

その中でも印象的なのが一番バッターの篠原選手だった。坂出商業との試合でサイクルヒットに迫る成績を残した。一番打者には出塁が求められ、それが最も大事なことである。しかし、もし長打を打てるのであれば、相手守備陣に与えるプレッシャーは相当なものである。守備陣のポジショニングが深くなり、一番バッターだけでなく、ほかのバッターに対しても深く守らざるを得なくなる。坂出商業との試合で敦賀気比は打ちに打ったのだが、深く守った外野手の前に落ちるようなヒットも見受けられた。

また、春日部共栄高校も「ストレートに的を絞り、打ち返す」という基本の攻めによって初回に5得点を挙げた。ピッチャーがストレートしか投げられない状態に陥ることは高校生では非常に多い。龍谷大平安の先発ピッチャーがそのような状態になった所を春日部共栄打線は逃さず、確実にとらえてきた。

観戦した試合では高いレベルの左ピッチャーを多く見る事ができた。今年の夏の長

野大会でもベスト4のうち3校はエースが左ピッチャーだったが、甲子園においても左ピッチャーが有効であることを確認できた。高校生では、右バッターでも左ピッチャーに対して苦手意識を持っている選手もかなりいるのではないだろうか。カーブ、スライダー系の変化球をひっかけてしまうこと、両サイドのストレート、スライダーやシュート回転のボールなど、左ピッチャーの球筋のイメージが少ないことが考えられるので、それらを克服できるような練習の仕方が大事になってくると思う。

開幕戦では春の選抜で優勝した龍谷大平安が敗退した。開幕戦の大観衆の中での緊張からか、百戦錬磨のピッチャーがバント処理ミスを犯し、制球難に陥った所を痛打されて初回の大量失点につながった。

甲子園に出るために

打撃力があることは大切だが、必ずしも出場校全てが140キロのストレートを打ち返して……という訳ではなかった。逆に考えれば、そのような打撃力がなくても、県代表になることは可能だということだ。そのためにはどのようなことを意識していけばいいのだろうか。

もちろんこれをやったから勝てる、という単純なものではないが、今回の観戦を通して思ったことを挙げる。

攻撃①バッターは狙ったボールが来たら打ち返す

ストレートはどのバッターでも135キロまでは打ち返せる状態にしたい(140キロを目標としないのは、甲子園出場を目標とした場合には現実味がないからである)。

攻撃②センターから逆方向に打つことを実戦で意識し、技術的な引き出しとして持つ

その効果は、例えば先に述べた左ピッチャーへの対策などで発揮されると思う。

攻撃③左ピッチャー、強肩キャッチャー相手でも走る

これも左ピッチャーの攻略という観点からである。どのようなバッテリーに対しても、足を使った攻撃でプレッシャーをかけられるような走塁を目指し、走塁の意識を高く持たないといけない。また、一般的な高校生の身体能力を考えると、走力を鍛えることも非常に重要である。

守備①一つ一つのプレーを大事にし、ミスを少なくする

甲子園出場校の守備を見ると、全体的な送球能力が高い。これを上回ることはなかなか難しい。しかし捕球や、バント処理では甲子園出場校でもミスが出ている。その部分での正確さを追求していくことで、堅実な守備をしていきたい。

守備②ピッチャーの制球力

特に、高校生ではストレートを低めに制球する意識なり動きが身につけていないことも多い。春日部共栄高校の金子選手は左のサイドスローで、低めに伸びのあるボールが決まっております、参考になった。

守備③ 9人で守る

相手の攻撃に対して、自分の能力等を考えて動き、中継プレーやカバーリングなど、9人の結び付きで守ることを徹底させたい。

これについては参考になったプレーがある。日大鶴ヶ丘―富山商業の試合の5回表日大鶴ヶ丘の守りの時のことである。ランナー3塁でレフトフライを打たれた場面だが、そのときホームへの中継にはサードだけでなくセカンドも入っていた。このようにフォーメーションは様々であるが、よく訓練された守備だということが動きから伝わってくるものがあり、見習っていきたい。

メンタル① リードを許した時に

実力の差があるわけではないが、大差がついてしまう試合も見られた。リードされた時に、そこで踏ん張るのか、ズルズル行って大差負けしてしまうのかの違いは非常に大きい。私の大学時代の公式戦の大半はそのようなことを考えながらの試合だった。

逆境をはね返す力が大舞台で発揮できるように、練習試合でリードされた時には「このゲームをひっくり返すんだ」という気持ちを持たせるよう指導していきたい。

球場内施設の見学から

大会一日目には、室内練習場(プロ野球ではブルペンとして使用している場所である)も見学させていただいた。ここに選手の荷物を置いておき、試合が終わるとベンチの入れ替えをするのだが、初出場の学校の場合は戸惑うこともあるそうである。しかし初出場の学校でも、荷物をきちんと並べて置くよう指導が行き届いており、ベンチの入れ替えがスムーズに行える学校が増えてきているようだ。

また球場内を見学する中で、大会役員、各都道府県の役員、審判、報道関係者など多くの方が関わることで大会が運営されていることを改めて感じた。

最後に

今回の研修では出場校の練習にお邪魔する時間がどうしても取れなかった。指導者の方のお話を聞くことはできなかったが、観戦を通して感じたものを自分なりに消化して、将来の指導やチーム作りに生かしていきたい。

今回の研修では寺澤先生や山岡先生を始め、さまざまな方々にお世話になりました。ありがとうございました。

平成 26 年度甲子園指導者研修報告書

明科高等学校 峯村和光

今回、甲子園指導者研修の機会を頂き、本当にありがとうございました。このような貴重な機会をくださった長野県高等学校野球連盟の皆様、中信地区の先生方、さらに、三日にわたり研修に同行して下さった、寺澤先生、山岡先生の両先生に、心より感謝を申し上げます。

この三日間で甲子園球場の雰囲気や甲子園に出場したチームの実力の一端に触れることができ、狭い私の野球観も広がった気が致します。ここで、この研修で、未熟な私なりに感じたこと、考えたことを報告させていただきます。

○ 開会式

今回、台風の影響もあり、日程がずれたため、開会式を見させて頂いたことは幸運でありました。今年で、誕生から 90 年の歴史をもつ、甲子園球場という場所の重みや雰囲気を感じられました。また、入場行進においては甲子園出場チームのそれぞれのカラーや雰囲気が感じ取れました。例えば、大きな声を出し、足も高くあげているチームや、それほど足もあげずに自然体で臨んでいるチーム等、さまざまなチームがありました。どのチームにも共通していたことは、自信と誇りをもって堂々と行進をしていたこと、そして、身長もそうですが横幅（特に下半身）も高校生とは思えないような強靱な肉体を持っていたことです。



○ 一日目 第一試合 春日部共栄（埼玉） 対 龍谷大平安（京都）

センバツ優勝校の龍谷大平安のシートノックでの、捕ったあとのスピードや流れるようなプレーをみて、私自身は龍谷大平安優位かと予想しておりましたが、試合は初回の攻防で決まってしまいました。初回、共栄の一番打者が平安の左腕、元氏君の、自信をもって投じた内角直球をとらえ、鋭い左前打。これに動揺したのか続くバッターの投前犠打を一塁へ悪送球してしまい、開幕試合の独特の雰囲気の中かでリズムを失って、球が高めに浮いてしまったように思います。その後、犠牲フライで先制し、初回到5安打を集中させて一挙5点を先制しました。リリーフした高橋君は威力ある直球とスライダーで共栄打線を封じたものの、平安打線は共栄左腕の金子君の変則気味で球の見づらいつりークォーターからコントロールよく繰り出される130キロ代中盤のストレートとスライダーに打たされてしまい、一点に封じられてしまいました。この試合では強豪校でも飲まれてしまう甲子園という場所の独特の雰囲気の怖さと共栄打線の強靱な肉体からの鋭いスイングが印象に残りました。

○ 一日目 第二試合 敦賀気比（福井） 対 坂出商（香川）

投打ともに敦賀気比が圧倒した試合でありました。敦賀気比2年生エースの平沼君はスライダーと140キロ代のストレートで圧倒。9回でも140キロ近くのストレートでスタミナも抜群で付け入る隙を与えませんでした。敦賀気比打線も鋭いスイングで一番の篠原君を中心にすばらしい攻めでした。坂出商の投手は120キロ代の直球とスライダーとカーブを中心に投げていましたが、低めが思うように決まらず、高めに浮いたところをとらえられていました。全体的に敦賀気比の力強さと集中力が際立った試合でした。

○ 一日目 第三試合 富山商（富山） 対 日大鶴ヶ丘（西東京）

ともにコントロールのよい左腕同士の投手戦でありました。富山商業の森田君はバランスのよいフォームから140キロ中盤のストレートとキレのよいスライダーを投げ込み、左打者は手が出ないといった状態でした。日大鶴ヶ丘の秋山君も130キロ代のストレートとスライダーをキャッチャーの構えたところに投げ込み、すばらしい投球をしていましたが、連打で少ないチャンスをものにした富商の集中力が勝りました。

○ 二日目 第一試合 東邦（愛知） 対 日南学園（宮崎）

東邦の藤嶋君の一年生とは思えない下半身からくり出される威力のある直球とカーブ、さらには堂々としたマウンドさばきが印象に残りました。何度も満塁のピンチをつくるものの、すばらしい腕の振りで相手をねじ伏せていました。また東邦の打線もスイングが鋭く、思い切りよく振り切っており、日南学園の好投手の横川君、柳君を打ちくずしていました。また東邦高校の応援は凄まじいものがあり、スタンドも一体となって対戦相手にもものすごいプレッシャーをかけていました。

○ 二日目 第二試合 星稜（石川） 対 静岡（静岡）

静岡の辻本君は130キロ後半のストレートとスライダーを軸に、コントロールよく低めに投げて、序盤はしっかり抑えていました。それに対し、星稜の岩下君は序盤は、コントロールが定まらず、暴投等で失点をしていました。しかし、終盤、雨で湿ったグラウンド状況もあり、静岡の内野守備の乱れをきっかけに『逆転の星稜』の本領発揮で逆転しました。岩下君も尻上がりに調子をあげ、高めの威力ある直球とフォークで静岡を押さえ込みました。この試合、星稜高校の終盤の集中力はすばらしいものがありました。逆に静岡は2年生主体のチームの若さがでて慌ててしまったように感じました。敗れましたが静岡高校のシートノックでの動きや体つきは公立高校とは思えないものがあり、見習うべき点が多々あると感じました。

○ 甲子園の裏側

球場職員の井本さんに甲子園の舞台裏を案内して頂きました。そこにはいかに効率よく試合をこなすか、どのように選手をケアするかといった工夫が随所に見られました。甲子園は、試合間が30分程度しかなく、そこで効率よく選手や応援団を入れ替えるため、外野や内野の出入り口を活用して、選手や応援団の動線を一方向にスムーズに流すための工夫がされていました。また、試合後、選手は理学療法士等によるクールダウン等のケアも十分に受けていることを初めて知りました。しかしながら、入れ替えは慌ただしく、初出場の高校などは何がなんだか分からないまま実力を出せずに終わってしまうこともままあるのではないかと思います。また、裏側でさまざまな人が支えてくださるからこそ選手はプレーできるという感謝の気持ちも忘れてはならないものだと思います。

○ 甲子園研修全体を通じて

この研修で野球のプレーの中で、特に印象に残ったことは、甲子園に出るチームの、強靱な体から繰り出される打球速度の違い、野手の守備位置の深さ（深い位置からでもダッシュが速いのと、肩が強いから間に合う）それに加えて、ここぞという場面での集中力の違いです。これらを身につけるためには、選手の身体づくりももちろんですし、技術面だけでなく選手の精神面も鍛えるための環境づくりが重要であると感じました。環境づくりという点で言えば、甲子園球場には近隣の小学生などの野球少年が多数訪れていましたが、このようなレベルの高い環境に触れるということも関西の強豪高校の強さを支える裾野であるとも感じました。

しかしながら、甲子園でもバント失敗やフォアボール、カバーの怠りなどから大量失点につながることもあったり、130キロ代のストレートでもコントロールよく、低め中心についていけば打たれづらいなど、甲子園とはいえども、基本のプレーはやはり大切であると再認識いたしました。

今回、甲子園の試合をバックネットのすぐ裏や、はたまた舞台裏から見せて頂いたことで、甲子園のレベルを肌で感じることができました。それと同時に、甲子園という場所の遠さも痛感いたしました。甲子園という場所をあこがれのままで終わらせないためにも、今回の経験を必ず生かし、成長していかなければならないと感じました。私は未熟者ではありますが、長野県高校野球の発展に少しでも貢献できるよう日々努力をしていきたいと思っております。